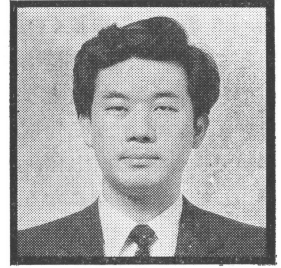


山田慎一氏のご逝去を悼む



気象庁予報部数値予報課の山田慎一氏が、去る2月15日17時過ぎ、研究留学先の米国ロスアンゼルス市内において交通事故のため急逝されました。まだ31歳の若さでした。

学生時代から同じ研究室、さらには気象庁という同じ職場で、切磋琢磨して気象学を研究してきた同僚であった、いやそれ以上に私にとっては大切な親友であった彼のあまりにも突然の死は、いまだに信じたくない、全く悲しい残念な出来事です。

山田君（彼の昔からの友人として、このように呼ぶことを許して頂きたい）は、1983年に京都大学理学部地球物理学教室を卒業後、大学院理学研究科修士課程に進みました。その間、廣田勇先生の指導のもと、赤道中層大気力学、特に、波と平均流との相互作用のラグランジュ的記述に関する理論的研究に取り組み、修士論文をまとめました。この論文においては、相互作用に対する平均流のシアの影響など、大変興味深い結果が得られていたにもかかわらず、彼の研究姿勢が大変慎重であったため、印刷論文にしなかったことが今となっては大変残念です。

山田君は1986年に気象庁予報部数値予報課に採用となり、その後一貫して気象庁全球スペクトルモデルの開発に携わって来ました。この間、鉛直ハイブリット座標、帯状流インプリット時間積分スキームの導入など、モデルの力学部分が彼の手で全面的に改良された点は、特筆されるべき業績であり、わずか数年の間に数値予報課の中心的存在となりました。さらに彼の行った、予報モデルに基づく移流・拡散計算や鉛直高解像度モデルによる長時間積分実験などの研究は、予報業務にとって重要なだけでなく、気象学的にも非常に興味深い内容の仕事でした。また気象学会でも、「天気」編集委員の中核として活躍していました。このように彼は、気象庁や気象学会の将来を担うべき人材として大いに嘱望されていました。

山田君は、こうした卓抜した学問的才能を持つ一方で、優しい思いやりのある好人物で、誰からも愛されていました。昨年の気象庁数値予報研修では、気象学的洞

察に富む解説と、ユーモアを交えた彼の分かりやすい語り口は、地方の気象庁職員に大変好評でしたし、数値予報課、気象庁の枠を超えた彼の広い交友関係は、私などには想像もできない広がりを持っていました。また、余暇の面では、その素晴らしい体格と運動神経を活かして、合気道、スキーなどあらゆるスポーツに挑戦していました。宴会の席でも彼はいつも主役で、豪快な飲みっぷりや友人顔負けの歌いっぷりなど、ありありと懐かしく思い出されます。

今年1月に彼は、UCLAの荒川昭夫教授のもとで研究に専念するため、2年間の予定で渡米しました。ここでは、全球数値モデルに全く新しいタイプの鉛直座標を導入する研究を完成する予定でした。昨年の暮れの壮行会で、留学先での期待に胸を膨らませていた山田君の姿が昨日のように思い出されます。山田君は、渡米早々、この新しいアイデアを具体化するため精力的に研究を進めていたようで、わずか1ヵ月の間に40ページにもわたる研究ノートが、彼の遺品として残されました。彼の希有な才能がまさに開かんとするこのような前途多々たる時期に、自転車で通行中、飲酒運転のひき逃げ事故に遭ったのです。まさに無念としか言いようがありません。

山田君を失ったことは、日本の気象界にとって大きな損失ではありますが、それよりも、年若くこれから多くの業績を残すことになったであろう彼自身、どんなにか心残りであったろうと思います。彼の残した多くの遺産を、我々の手で開花させ、気象学のさらなる発展を志すことが、彼への一番の供養であると思います。

立派な体格を持ち、いつもにこやかな姿で接してくれた山田君の思い出を大切に、今はただ彼のご冥福を祈るのみです。山田君、安らかに眠り下さい。

追記：荒川昭夫教授からの連絡によると、ロスアンゼルス現地に遺された山田さんの財産数千ドルは、御遺族の強い希望によりUCLA大気科学部に寄附された。同学部では、その利子により毎年専門書等を購入し、Yamada LibraryまたはYamada Collectionとして使わせて頂くとのことである。（気象大学校 向川 均）